早川町応援団獲得マガジン

やまたらけ

YAMADARAKE

APRIL
No.34
2009

雨畑硯にかける想い

硯匠庵にある、亀の形をした３つの雨畑硯。どれも町民が所蔵。

雨畑硯といえば、昔から良質な和硯として全国的に有名である。その歴史は七百年前まで遡ると言われ、江戸時代より将軍、天皇にも幾度となく献上されてきた。また、昔から文人墨客からの愛用も多く、「雨畑硯」の質の確かさと知名度の高さは今や確実なものとなっている。

では、雨畑硯の価値の本質はどこにあるのだろうか。それは雨畑地区の奥に位置する、稲又集落の坑道で採れた原石の質にある。この原石の価値は、硯となり、墨を磨るときにわかるその滑らかさや、できた墨汁の伸びや持ちとして昔から知られてきた。そして近年になり、その原石の質の素晴らしさは、科学的な実証をもっても明らかにされている。

この雨畑硯の価値を守るため、雨畑地区では、大正時代より地元で採掘された硯石を「雨畑真石」と呼び、その品質を保証してきた。雨畑の住人の雨畑硯にかける誇りと想いは「雨畑真石」という四文字となり、硯の裏に深く刻まれているのである。

このような「雨畑真石」の価値の保護と存続を巡る活動は、今なお「硯匠庵」という町立の施設を中心に受け継がれている。

今回の特集では、「雨畑真石」の質を探究し、本来硯がもつ性質の奥深さと、後世までこの資産を繋げたい、という想いを地元雨畑の住人にかわり伝えたい。そして近ごろ私たちが忘れられがちな、筆で文字を書くということの素晴らしさを再認識していただければと思う。（松井桃子）

科学で解明！雨畑真石がすごい理由

硯の良し悪しはその石質で決まる。雨畑で作られている雨畑硯の原石は、全て早川の支流である雨畑川上流の、稲又山付近の坑道から採石される。この石を特に「雨畑真石」と呼び、他の山で採掘された石と区別する。

雨畑真石が良質であることは科学的にも証明されている。一般的に良質の硯は石に含まれる「鋒鋩（ほうぼう）」という、墨を磨るときに細かいヤスリのような役割をするものが多く含まれることが重要視される。山梨大学の石田高氏の研究（1993年）では、原石を偏光顕微鏡で微細な組織を観察し、X線解析像で分析した結果が報告された。調査の結果、雨畑真石には適当な量の白雲母（すなわち鋒鋩）がいろいろな方向を向いて含まれていた。これは原石が薄く剥げたり、砕けたりし難いことを意味している。土壁の強度を増すために入れる藁を、原石に含まれる白雲母と考えるとわかりやすい。適度な量の白雲母ができるためには、岩石が生成されていく中で適当な温度や圧力等の条件が必要となる。

この良質な原石は、正に自然の生み出した偶然の産物なのである。

使ってわかる雨畑硯のここがすごい！

価格 35万円
高さ7cm、幅17cm、奥行き25cm

雨畑真石の科学的価値は前述した通りだが、では実際、硯としてどのように素晴らしいのか。

❶ 磨ってわかる！

雨畑硯は、その鋒鋩の細かさと密度の濃さから、磨り味が大変良いと言われる。

実際、少量の水をのせた硯の上でささっと墨を3往復程度すべらせただけで真黒な墨汁が出来上がる。硯と墨が磨れあう音も立たない。

❷ 書いてわかる！

雨畑硯は、さらっとして伸びが良い墨汁を得ることができる。細かな鋒鋩の粒子のおかげで墨汁がだまにならないため、最後のはらいまでうまく墨が伸びる。

さらに、水もちが良く、墨が乾きにくいのも特徴だ。地元では「息を吹きかけても文字が書ける」と言われているほどだ。試しに息を硯に吹きかけて指でなぞると、硯の湿りが持続しているのが良くわかった。

❸ 愛用してわかる！

せっかく良い品物を手に入れたならば、何でも永く大切に使いたい。雨畑真石には適度な硬度があるため、鋒鋩が長持ちし、長年の使用にも耐え得る。使ったら水洗いし、乾かして布で包み、直射日光を避けて保管すれば生涯使い続けることができる。

❹ 文学にも登場！

硯の質の良さはさることながら、文学の世界にも雨畑硯の影響は及んでいる。『点と線』『瞳の壁』等で有

名な芥川賞作家、松本清張との関わりである。

清張は昭和35年に連載発表された推理小説『考える葉』で早川の雨畑硯を題材にしている。清張はこの取材で2度にわたり雨畑地区を取材している。その際清張が興味を持った、硯職人の、長いのみの柄が当たってできた胸部のタコが物語の重要な鍵となっている。

硯文化を今に伝える硯匠庵

硯匠庵は地域づくりの拠点、文化創造の発信の場として2000年に開館した。

【写真上】硯匠庵の外観。ヴィラ雨畑のすぐ隣にある。【写真中左】町民が持ち寄った硯。【写真中右】実際に販売している雨畑硯。高いものでは40万円のものもある。【写真右】松本清張が雨畑硯を題材に書いた『考える葉』の表紙。

玄関には硯石の原石を採掘する坑道を思わせるデザインが施されており、モダンな印象の建物である。館内には硯や書、絵画等300点ほどが展示されており、そのほとんどは地元住人の提供で成り立っている。

硯職人にしかわからない悦びを

この硯匠庵には、現在雨畑で硯を彫っている唯一の職人がいる。硯を彫って30年になる望月玉泉さんだ。

玉泉さん
硯を彫って30年。硯彫り体験の指導もしている。シンプルで、筆の墨を切りやすい形が玉泉作品の特徴。

玉泉さんは、父である麗石さんに20歳の時に師事した。採石してきた石を平らにする作業だけの修行を1年続け、石の目を読む力を養った。

硯職人でないとわからない魅力が雨畑真石にはある、と玉泉さんはいう。「磨いていてうれしくなるような石」と玉泉さんが表現するその石には、100枚に1枚か2枚しか出会うことができない。石に傷がなく、石の石紋が澄んでおり、磨くと粘り気がある。そのような石を彫るときは、硯職人としてのやりがいを感じる一番の時だと語る。

玉泉さんが父のもとで彫り始めた当時は、2人で1日10枚製作しても追いつかないほど硯の注文があった。硯の需要が落ちた今、後継者となる若者の存在も気になる。「一番

なぜ雨畑で硯石が採れるのか

早川町を南北に、糸魚川静岡構造線が走っています。この構造線は日本を東西に分け、東は凝灰岩類、西は黒色粘板岩からなっています。雨畑硯は、この黒色粘板岩を使って作られています。まさに、雨畑だから採れる自然の恵みなのです。

なお、新倉には、この断層の露頭があり、国の天然記念物にもなっています。

雨畑硯の歴史

■起源(伝承)

・永仁5年、日運大上人の弟子、日朗上人が七面山開山の帰路、雨畑川上流で蒼黒い石を見つける。それを地元民に彫らせたところ、上質の硯が出来上がり、雨畑硯ができた。

■江戸期

・一七八四年(天明4年)、一橋公に硯を献上し、賛美されたことからますます盛んに生産されるようになり、雨畑硯の名が全国に知れ渡る。

・石の採掘と見せかけて金の採掘をする者が現れたため、度々幕府により原石の切り出しを禁じられる「禁山(とめやま)」となる。雨畑の硯職人たちは雨畑川原の流石に頼るほどに追い詰められ、遂に将軍徳川家茂公に雨畑硯を献上し、再び採掘の許可を得る。

は若い人が自分の後を継いで彫ってくれるのがいい。だけど最初は地元の人が暇な時に彫って帰るだけでも構わない。」玉泉さんの一言に、遅咲きでも良い、本当に石の良さがわかり、彫ろうという気持ちになった人に任せたい、という職人の想いを感じた。

たかが硯、されど硯

硯匠庵に勤めて5年の望月信子さん。「鑑賞の機会を親子で持つことが大切。」と考えている。

退職後の趣味として書を始めるために硯匠庵を訪れる人は多いが、子どもに文字を書くことへ目を向けさせるのは親。パソコンで文字を書くことが多くなってきた今、硯匠庵で筆の文化に触れて親子で感動し、書の楽しさを感じてほしいと話す。

「硯に向かって、墨を磨りながら、これから書く書の墨のにじみ具合や、筆運びまでをも考えます。そうして書かれる文字には、誰に評価されるわけではない、個人の持っているもの全てが出てくるんです。たかが硯、されど硯なんですよ。」と硯に向き合う重要性を教えてくれた。

未来へ繋ぐために

最後は、開館前の構想段階から硯匠庵に関わってきた館長。「欲しいと思って手に入るわけではない、自然の資源をせっかく持っているのだから、大切にしないといけない」という想いで硯匠庵を支えている。館長に、一時間かけて館内を丁寧に案内してもらうと、いかにその石の質の良さが貴重で、これからも残していくことが大切かをその強い想いとともに納得させられる。「今は修行をさせてほしいという若者はいないけど、展示や硯製作体験を通して過去、現在を知り、そしてこれから、硯はどうしていけばよいか、考えてもらうことが重要だと思っています。」とその目は未来へ向かう。

雨畑で硯を彫る職人が一人になってしまった今、雨畑地区には、硯匠庵を中心に様々な想いで雨畑真石の素晴しさを伝え、これからもその自然の財産を残していこうと奮闘している人たちがいる。

新しいことを始めるのに絶好の春、まずは久しぶりに硯に向かうことから始めてみよう。(松井桃子)

【写真上】
望月信子さん
硯匠庵設立前、「調査委員会」メンバーとして、地元稲又地区の名硯を調査。現在は館内の案内や喫茶を担当。

【写真左】
定期的に開催する絵手紙展の様子。

望月健さん
硯匠庵の館長。早川町役場を定年退職し、構想段階から硯匠庵設立に携わる。それだけに雨畑硯と硯匠庵に対する想いはひとしお。

■明治期
・硯の需要の高まりとともに雨畑の硯職人の数の最盛期を迎える。雨畑地区にも一〇〇名以上の硯職人がいたという記録が残る。
・雨畑硯の名が高まる一方で雨畑産の硯を装った偽作も出回るようになる。
・明治9年頃、販路拡大と偽物防止を目的に「雨畑硯生産組合」が設立される。

■大正期
・組合では雨畑で採れた石を「雨畑真石」として他と区別して販売開始。また無料鑑定を行うことにより偽物対策に乗り出す。

■昭和期
・昭和22年、昭和天皇に雨畑硯が献上される。(天皇への硯の献上は江戸時代から明治、大正と続いてきた。)
・昭和期後半、戦争中の軍への狩り出しや戦後の復興、硯需要の低下などの理由で雨畑の硯職人の数は3、4人に激減。

■平成期
・平成6年、雨畑硯はその伝統と実用性が認められ、山梨県郷土伝統工芸品に認定される。

雨畑硯をお求めの方は硯匠庵のホームページをご覧下さい！
http://www.salps.net/user/amehatasuzuri/

硯の世にも見所たくさん
雨畑硯の里を訪ねてみよう

バンガロー、
アスレチック有り
山の上のキャンプ場。
眺め抜群！

富士山ポイント
硯の里キャンプ場

↑
早川町役場

馬場

雨畑湖が一望

雨畑自然遊歩道
約30分の登り道

廃校を活用した温泉宿泊施設。日帰り入浴も可。豆腐料理が８品並ぶ豆腐御膳が自慢（３日前までに要予約）。

つり橋

ヴィラ雨畑

急傾斜の
畑に広がる
お茶畑は圧巻

奥沢橋

老平

奥沢

←笊ヶ岳
登山道

硯匠庵
雨畑硯、中国や国内の名硯を多数展示。雨畑湖を見渡す喫茶室で一服。あ～幸せ。硯作り体験は要予約。

雨畑湖

東京発電

故 望月知石氏
硯工房跡と直売所
３年前まで職人が実際に硯を製作していた工房が当時のまま保存されている。当時の自宅工房が見れるのはここだけ。硯の直売もしてくれる。

対岸の河原
硯匠庵向かいの河原に行くと、黒い石が結構落ちている。質は落ちるが、硯石の仲間であることには違いない。

共同生産所跡
この辺りで、硯の共同硯生産と、問屋をしていた。専業の職人も兼業の職人もここに集まり硯の製作をしていた。

山々と湖とつり橋の
光景が美しい！

近野橋
（つり橋）

七面山
雨畑参道→

正徳寺

本村

雨畑茶の製茶工場
5月中旬から下旬のみオープン
新茶のいい香りが漂う！

製茶工場

岳龍窯・とくり

早川に移り住んで20余年。
陶芸家・米山久志氏の焼物と
奥さんであるのぶ子さんの
藍染め作品のギャラリー。

大家硯舗
かつて工房があり、その後書道教室となった場所で硯の直売をしている。個人工房での硯直売所としては最も品揃えが豊富。

七面大明神

落差55ｍの大迫力。２段目の壺に金があると言われ、何人かの若者がこれを取ろうと試みたが、断崖絶壁のため全て失敗してしまったらしい！

見神の滝

静岡・井川
↓

早川旬の直送便

香り豊かな春の山の恵み
「山菜の詰め合わせ」

一年でこの時期しか味わえない山の恵み。貴重な山菜の詰め合わせです。ほろ苦くて香り豊かな山菜で、春を感じてみましょう。

料金／通常2,600円・会員2,300円＋送料950円
内容／500g以上：たらの芽、コシアブラ、コゴミ、ウド、ワラビ、タカノツメ、フキなどの中からその時おすすめの３～４種類を詰め合わせ
発送／４月下旬以降、注文順に発送
締切／４月27日(月)

雨畑硯の里の、もう一つの特産品！
「雨畑茶粉アイスクリーム」

硯の産地、雨畑地区では、霧が降りる土地柄、おいしいお茶が採れます。そのお茶の粉を贅沢に練りこんだ、風味豊かなアイスクリームです。この機会に、どうぞご賞味ください。

価格／通常1,800円・会員1,500円＋送料950円
内容／250ml×6個入り
発送／注文順に順次発送
締切／通年、受け付けます。

■注文・お問い合わせ先
「やまだらけ編集部」

電話／0556-45-2101 (9:00～19:00)　**ファックス**／0556-45-2268 (24時間対応)　**メール**／shop@joryuken.net (24時間対応)

いずれも、注文者氏名、住所、電話番号、お送り先氏名、住所、電話番号、商品名、数量をご連絡下さい。ファックス、メールでお申込の場合、折り返しご連絡いたします。３日経っても連絡がない場合は、お手数ですが電話でお問合せください。支払いは、商品と一緒に請求書をお送りしますので、指定の金融機関へお振込みください。※会員とは、早川サポーターズクラブ、及びNPO法人日本上流文化圏研究所の会員のことです。

はやかわのとうげみち 6

長畑～新窪乗越～新田～三河内

新窪乗越（しんくぼのっこし）

西暦2000年の頃、早川町では標高2000mの行田山への登山道を整備した。その行田山から、県境の稜線を西に進むと、新窪乗越に出る。

初夏になるとシロヤシオ（ゴヨウツツジ）などが咲き、なかなか雰囲気の良い峠だ。だが、稜線の静岡側は、日本三大崩れにも数えられる「大谷崩れ」という崩壊地で、はるか下まで見えてしまうのが少々恐ろしくもある。

さて、「雨畑（あめはた）は〝安倍端（あべはた）〟が変化したもの」とも言われるほど、雨畑（硯島地区）と静岡とのつながりは強い。

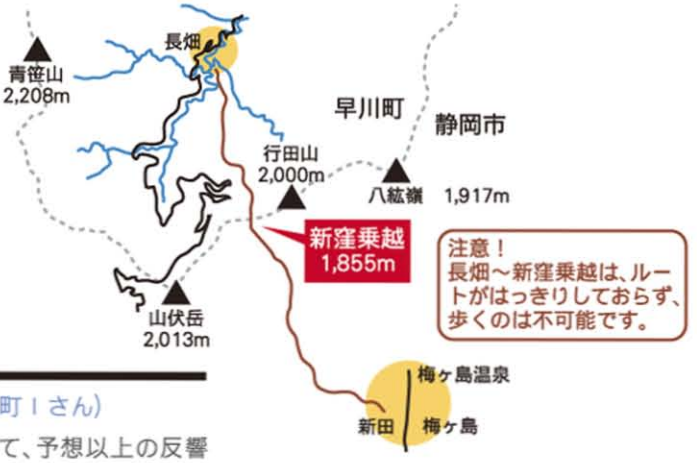
そのつながりの舞台となっていたのが、この新窪乗越だった。

雨畑の人は、この峠を越えて静岡にお茶を買いに行き、静岡の人はシイタケを求めてやってきたという。雨畑で栽培されているお茶も、この峠を越えて入ってきたのだろう。また、雨畑と梅ヶ島の間には、婚姻関係もあったという。

『甲斐国志』によれば、長畑から新田までは1日かかったという。ある時は花嫁が、あるいはお茶やシイタケを背負った村人は、何を思い、どんな光景を眺めながらこの長い道のりを歩いたのだろうか。想像は尽きない。

新窪乗越の峠付近。

上：峠の道標。右の「大谷嶺」とは、標高2,000mの行田山のこと。
左：峠付近には、白く可憐なシロヤシオが咲く。



注意！
長畑～新窪乗越は、ルートがはっきりしておらず、歩くのは不可能です。

読者の声

●今号のやまだらけを読むまでは、正直「森林組合って何？」と思っていましたが、呼んで見方が変わりました。お金を稼ぐことが目的なのではなく、「国土の維持管理と地球環境の保全のために健全な森林を育てる」という人間が生きていく為の根本的な部分に関わる素晴らしいお仕事をされていたのですね。（浜松市Ｙさん）

●森林組合の記事、興味深く熟読させて頂きました。やはり、自治体の発展を考える上では、産業の振興が不可欠だと思いますし、苦境に立たされる地方自治体にあって、早川町が健闘しているのは、そのビジョンが明確であるからだと改めて感じました。（横浜市Ｍさん）

●やまだらけ33号で早川町森林組合の仕事や活動を知ることができました。林業の大切さがわかりました。ベテランの方、若手の組合員の皆様の頑張りに声援を送ります。マウント品川（丸山）で皆様にお世話になっております。（品川区Ｋさん）

●地元の木で、人が住む家を造り暮らす、そんな当然の時代が戻ってくるでしょうか。戻ってほしいですね。（身延町Ｉさん）

編集部：森林組合に対して、予想以上の反響を頂き、ありがとうございました。96％が森林の早川町ですから、やはり森林と共に生きていくのが、最も自然なあり方なんだと思います。その中で、今後は木材生産に限らず、山にどれだけ多様な価値を見いだしていけるかが鍵になるのではと考えています。

NEXT やまだらけ

35号特集（6月上旬お届け）

「夏秋集落に生きる」

国道から南アルプス街道を通って、早川町に入ってすぐの所に「夏秋入り口」という看板が立っています。ここから細い山道を車で10分ほど登ると、「夏秋（なつあけ）」という集落にたどり着きます。

この集落に暮らすのは、わずか数名。俗に言う限界集落です。でも、そこで暮らす人たちは、とっても生き生き、キラキラ輝いています。これは、この土地のなせる技に違いない！そんな夏秋の魅力を掘り起こし、皆様にお届けします。

豪華賞品？が当たる やまだらけクイズ！12

問：天下に誇る名硯「雨畑硯」が登場した、松本清張の作品のタイトルは、以下のうちどれでしょう。

答 1，『考える葉』
　 2，『萌える葉』
　 3，『目に青葉』

正解者の中から抽選で２名様に、**雨畑真石のペーパーウエイト**をプレゼントします！

前回のクイズの正解は、３の「ノコギリとナタ」でした。抽選の結果、望月さん（甲府市）、森と水の源流館さん（奈良県川上村）、森山さん（横浜市）の３名が当選しました。おめでとうございます！

総投票数24通で、なんと全員正解でした！

今回の取材を前に、硯匠庵で硯作りを体験しました。玉泉さんから直接指導してもらえます。海をみので彫り、砥石とやすりで磨きをかける作業で約１時間。自分で掘ると、海から陸までの傾斜や、淵の角張り具合等、硯の見方が今までとかわってくるのでお薦めです。硯匠庵で筆も買ったし、あとは身延で西島和紙の手漉き体験をして、十数年ぶりに書道をしようかな。

山を覗けば宝の山 【やまだらけ】

発行元／フィールドミュージアム運営委員会
住　所／山梨県南巨摩郡早川町薬袋430　〒409-2727
電　話／0556-45-2160　ファクシミリ／0556-45-2268
ホームページ／http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/fm/